

[書 評]

Christopher M. Wojtulewicz
Meister Eckhart on the Principium
An Analysis of the principium in his Latin Works
(*Eckhart: Text and Studies*, 5)
Leuven: Peeters, 2017, pp. XII + 285 ISBN: 9789042932531

松澤 裕樹

著者 Wojtulewicz 氏は、現在、オックスフォードにあるアンスコム生命倫理学センターの教育研究員であり、ケンブリッジ大学プラトン主義研究センターの客員研究員、ルーヴァン・カトリック大学の自由研究員、その他、イギリスの複数の大学で講師を務める若き研究者である。その研究領域は幅広く、中世後期の哲学的神学（トマス・アクィナス、マイスター・エックハルト）を軸としつつ、二十世紀の哲学者におけるその受容史（マルティン・ハイデガー、エーリッヒ・ブシュワラ）をも射程に入れている。また、形而上学と精神分析学（ジャック・ラカン）の比較研究を通して、人格に関する哲学的・神学的問題や技術革新・デジタル文化に起因する現代的問題の探求も進めている。

本書『マイスター・エックハルトの始原論——そのラテン語著作における principium 概念の分析——』は、表題からもわかるように純粹な中世思想研究である。本書の出版により、著者には、ハイデルベルク大学国際・学際神学研究センター（FIIT）より 35 歳以下の優秀な若手神学研究者に贈られるマンフレート・ラウテンシュレーガー賞が授与された。

本書の目的は、聖書註解を主とするエックハルトのラテン語著作における principium 概念の全体像を把握することにある。しかし、著者の隠された意図はそれとは別のところにある。それは、principium 概念の分析を通して、エックハルトのドイツ語説教における鍵概念である *grunt* と当概念の密接な関連を示唆することである。

本書の内容について紹介する前に、エックハルト研究史における本書の位置づけについて、先行研究として特に重要だと思われる McGinn と Waldschütz の研

究¹⁾と関連付けながら考察を進めたい。

McGinn は、エックハルトの神秘思想を「grunt の神秘思想」と名付ける。「神の grunt は私の grunt であり、私の grunt は神の grunt である。私はそこで、神が神固有のものから生きるように、私固有のものから生きる。」²⁾と語られる grunt における神と私の一。この grunt の自覚に、彼はエックハルトの神秘思想の独自性を見る。

McGinn によれば、中高ドイツ語 grunt に対応するラテン語は存在しない。scintilla animae や abditum mentis は、神と魂の一を人間の側面から捉えた語に過ぎず、deitas や principium は、それを神的側面から捉えた語に過ぎない。それゆえ、彼は両側面を包含する概念 grunt と principium 概念を同義とする見方を退ける。

その際、McGinn は、principium 概念を、神的流出の能動的性質を表す概念として理解するが、本書では、それとは異なる新たな概念像が提示される。それにより、McGinn の結論に異を唱え、principium と grunt 両概念の密接な関連を示唆することが本書の意図であると言えよう。

一方、Waldschütz の研究は、両概念を詳細に分析した上で、両者の同等性を結論付けており、本書の意図に酷似した先行研究である。したがって、本書に何らかの学術的貢献があるとするならば、それは新たな観点からの principium 理解を除いてはありえない。本書における principium 理解の独自性を明らかにすべく、まずは Waldschütz の principium 理解を簡単に見ておこう。

Waldschütz によれば、principium 概念は、神と被造物の「始原」としての神、つまり「関係における存在 (In-Beziehung-Sein)」としての父なる神を表す。父なる神は、二つの関係を有しており、神的ペルソナの流出との関係においては principium として、被造物の創造との関係においては prima causa として存在する。父なる神は存在授与者であるが、その存在は principium である神の子と神の子になり得る人間には同名同義的に、causatum である被造物には類比的に与えられる。父から存在を受容した神の子と被造物もまた「関係における存在」であり、「父に向かう存在 (Sein-zum-Vater)」として principium/prima causa を志向する。

以上のように、Waldschütz は、三位一体論における principium 概念の適用に着目する一方で、創造論における当概念の適用を度外視する。それに対し、本書では、principium 概念を用いる際のエックハルトの関心が、三位一体の関係を語る

1) Bernard McGinn, *The Mystical Thought of Meister Eckhart: The Man From Whom God Hid Nothing*, New York, 2001.; Erwin Waldschütz, *Denken und Erfahren des Grundes: Zur philosophischen Deutung Meister Eckharts*, Vienna, 1989.

2) Meister Eckhart, *Pr.5b, DW I*, 90,8-9.

ことよりも、むしろ「神と被造物の弁証法」と呼ばれるような神と被造物の関係を語ることにありという点に着目する。ここに本書の独自性がある。

本書は、序章を含めて五部構成になっている。序章では、*principium* 概念をあえて翻訳せずに代教記号として扱いながら定義の構築を図るラカンの方法論を採用することが明言される。続いて、ギリシア教父における *arche* 概念とそのラテン語訳である *principium* 概念のラテン教父とエックハルト以前の神学者における使用法を概観し、当概念が神的ペルソナの流出や創造の能動的起源として理解されてきたという点が確認される。第一章から第四章では、エックハルトのラテン語著作における *principium* 概念の詳細な分析が展開される。各章の表題はそれぞれ、第一章「*principium* における存在と生成」、第二章「創造的なものとしての *principium*」、第三章「*principium* の内なる誕生」、第四章「*principium* におけるキリスト論と人間のペルソナ」となっている。

各章には内容の重複が見られるため、各章の内容を逐一紹介することはせず、「神と被造物の弁証法」を語り出す概念として理解される *principium* 概念の特徴を、評者の視点から四つ抽出することで、著者の主張を簡潔に提示したい。

本書の一貫した主張は、エックハルトが、対立即同一という弁証法的関係にある神と被造物の関係を、*principium* 概念を用いて、*principium* と *principiatum* の関係として理解したという点にある。この関係性は、存在論の文脈では、神的存在と被造物的存在、イデアと形相の関係、人間論の文脈では、義と義人、人間本性における神の言と魂における神の言の関係に適用される。この弁証法的関係における第一の特徴は、二つの関係項は同一のものであるが、様態において異なるという点にある。第二の特徴は、非区別性と区別性、不変と変化といった相反する様態にある二つの関係項において、前者が後者の最内奥に浸透していることにより、両者が同時的に共存するという点にある。第三の特徴は、*principium* における働きの現在性にある。永遠の今において、*principium* は絶えず新しく *principiatum* を生み出し、また創造する。第四の特徴は、二つの関係項における無所有性にある。存在授与者である *principium* と存在授受者である *principiatum* は共に無所有であることにより、両者の一が成立する。

本書は、*principium* 概念を神的ペルソナの流出や創造の能動的起源を表す概念として用いた中世の神学者とは異なる観点からそれを新たに神と被造物の弁証法的関係を表す概念として用いたエックハルトの独自性を露わにしたという点で、キリスト教思想史の分野における卓越した研究である。

また、エックハルト研究史の観点から見ても、本書の学術的貢献は大きい。神と被造物の関係はこれまで、Mojsischの研究³⁾に代表されるように、同名同義的

3) Burkhard Mojsisch, *Meister Eckhart. Analogie, Univozität und Einheit*, Hamburg, 1983.

関係と類比的関係を区別するという仕方での理解が試みられてきたが、それをいかに区別して整合的に理解するかという点において議論は紛糾しており、研究者間における統一的理解には未だ至っていない。そのような状況の中、本書が principium 概念の分析を通して、神と被造物の関係を対立即同一という弁証法的関係から理解するという新たな可能性の道を切り拓いたという点は評価に値する。

そして、本書最大の学術的貢献は、principium 概念の分析を通して、当概念とエックハルトの神秘思想の核心をなす grunt 概念の比較研究を、Waldschützとは異なる新たな観点から発展させる基盤を作り出したという点にある。本書において、著者は grunt 概念に関する明確な言及を避けつつも、人間論を主題とする第四章では、principium と principiatum の関係が、神の grunt と魂の grunt の関係に対応するという点を幾度も示唆している。エックハルト研究において、神学的性格を持つラテン語著作と司牧的性格を持つドイツ語著作を統合的に理解し、その思想の全体像を把握することは非常に困難な課題ではあるが、本書はこの課題を解決するための新たな道筋を提示した研究としても非常に意義深い。

本書の執筆からすでに五年が経過したが、著者による grunt 概念の研究は未だ発表されていない。Wojtulewicz 氏による本書の続編に期待したい。